

11 末梢性顔面神経麻痺後遺症による ワニの涙症状に対するボツリヌス毒素療法 (医療従事者向け)

重症のBell麻痺、Hunt症候群による末梢性顔面神経麻痺の後遺症として、食事の際に涙が出過ぎて困る症状があらわれることがあります。この後遺症は“ワニの涙”症状として知られています。顔面神経には表情筋に分布する運動神経の他に、唾液の分泌や涙の分泌に関わる副交感神経が含まれています。顔面神経の障害後にこれらの副交感神経が回復する過程において、誤った方向に神経が再生し、涙腺と唾液腺の両者の分泌を司る神経回路ができてしまいます。そのため、摂食により唾液の分泌が亢進するとともに反射的に涙も分泌されるようになり、“ワニの涙”が発症すると考えられています。

最近、“ワニの涙”症状に対しボツリヌス毒素の涙腺内注入療法が有効との報告が増えつつあります。ボツリヌス毒素は汗腺や唾液腺において神経末端に作用し、汗や唾液の流出を抑える作用があります。ボツリヌス毒素を“ワニの涙”の治療に適用することは、その発症機序からも理にかなった方法です。しかし、日本では保険診療上の適応がなく、まだ一般的な治療法とみなされておられません。当科では、当院の倫理委員会での承認を得て、末梢性顔面神経麻痺後遺症によるワニの涙症状で苦痛が生じている患者さんに対し、ボツリヌス毒素療法を行い、その臨床効果および副作用を検討しております。

治療は外来診療で行い、約15分程度で終了します。通常、顔面神経麻痺後遺症の病的共同運動・顔面痙攣のボツリヌス毒素治療も同時に行うため、その残薬を涙腺内に注射します。予想される副作用としては、注射部位の血腫形成による腫れ、痛みがあります。痛み止めなどで対応します。また、涙液の分泌低下による目の乾燥感があらわれることがあります。点眼薬で対処します。眼瞼を吊り上げる筋肉や目を閉じる筋肉に薬剤が浸潤することにより眼瞼の下垂や目が閉じにくい症状が生じることがあります。これらの副作用は、薬の作用が予想以上に強くあらわれた結果と考えられるもので、薬の効果が弱まるとともに回復していきます。

【参考文献】

1. Riemann R, Pfennigsdorf S, Riemann E, et al. Successful treatment of crocodile tears by injection of botulinum toxin into the lacrimal gland: a case report. *Ophthalmology*, 106:2322-2324, 1999.
2. Montoya FJ, Riddell CE, Caesar R, et al. Treatment of gustatory hyperlacrimation (crocodile tears) with injection of botulinum toxin into the lacrimal gland. *Eye* 16:705-709, 2002.
3. 田中一郎, 大出尚郎, 國弘幸伸. 顔面神経麻痺による「鰐の涙」に対するボツリヌストキシン治療の経験. *Facial N Res Jpn*, 26:158-160, 2006.